Global Service Learning 体験記

●活動先国：インドネシア
●活動期間（実際の現地滞在期間）：西暦　2024 年　8 月～　2024 年　8 月
●学部・学科：人文学部 英語英米文化学科
●参加時の学年：3 年

今までの大学生の夏休みを勉強やアルバイトに費やしていた私にとって、今年の夏こそより有意義な時間にしたいと考えていた。そこで思いついたのが留学であり、なんとなくイギリスやノルウェーなどに行ってみたいと漠然と計画を立てていた。ただ、留学に行って現地の学校に通うだけであったら、旅行とさして変わらないのではないかという不安もあった。そんな中、3 年生に進学してすぐに行われた留学ガイダンスで、ボランティア留学の存在を知り、そのなかに「日本語教育」という言葉を見た瞬間、これに行きたいと思い立ったのが今回のインドネシア留学の発端である。元来、他人をサポートしたり、人のために何かをしたりすることが好きだった。大学で教職課程を履修しているうえ、英語も今までずっと勉強してきているから、自分の知識を活かせるはずであるし、自分の経験になってくれる留学で、誰かの役に立てる一石二鳥のチャンスだと思った。

インドネシアへ発つ前に、3 つの目標を掲げた。インドネシアについて詳しくなること、実用的な英語力を伸ばすこと、そして日本人に対して良い印象を持ってもらうことだ。インドネシアでの滞在は、インドネシアの文化や暮らしを体験できる貴重な経験だ。ホームステイ先の家庭や、活動先の幼稚園はムスリムの人が多く、馴染みのないイスラム教についても詳しくなることを期待していた。また、日本からのボランティア生ということで、あちらにとっては日本人の代表である自分が、良いイメージを持ってもらえるよう私が今できる最大限に頑張ろうと意識した。

インドネシアでの毎日は、朝 4 時 30 分から始まる。近所のムスクから、お祈りの時間の合図が鳴り、それによって起きざるを得ない生活だった。あまりにも早起きすぎて驚いたが、その分一日の活動できる時間が増えて、健康的で充実した日々を送ることができた。ただ幼稚園で、子供たちが帰った後に先生数人とお昼寝する時間があるほどに、そこでの生活はのんびりとしたもので、早起きが苦痛になることはなかった。シャワーの時間が夕方であるのが普通であったり、幼稚園生が午前 10 時に帰ったりと、日本とは生活の時間が異なっていて、仕事の価値観や生活の基礎というものから違うのだろうと感じた。宗教に基づいた生活は、他のところにも見られた。イスラム教について有名なのは、食事中と挨拶をする時に左手は使ってはいけないこと、人の頭を触ってはいけないことなどである。他にも 1 日 5 回のお祈りと、金曜日にはムスクへお祈りに行くこと、人と会うときには女性はヒジャブを被らなくてはいけないことと、イスラム教としての生活を肌で感じた。ただ、私が思っているよりもイスラム教のルールは厳しくはないのだと感じた。もともと、イスラム教に対して怖そうなイメージをもっていたが、それは数少ないイスラムに関するメディアによる情報だけで組み立てられた偏見だったのだと気が付いた。彼らは自分の意志でムスリムになったのであり、好きでやっていると話してくれた。私が赴いた幼稚園で子どもたちと会ったときは、握手をしてその手を子供の額のどこかにあてることが当たり前であり、朝 30 分間ほどお祈りの合唱をする時間があった。幼いころは、堅苦しいものではなく、楽しみながら宗教を感じることに順守しているように感じた。

8 月 17 日はインドネシア人にとって大切な日である。独立記念日、日本軍やオランダから独立したその日のある 8 月いっぱいは、どこでもお祝いムードだった。各家で、玄関の前には旗を掲げ、家をライトアップして街並みを賑やかにし、学校内や地域住民の間で LOMBA という小さな運動会のような催しを何回も開催していた。その中で、日本はインドネシアを統治していた歴史もあったことから、私のような日本人がそのお祭りに参加するのは良くないのではないかという心配があった。きっといい顔をされないだろうと思っていた。しかし、そんな心配を吹き飛ばすくらい、インドネシアの人たちは私を歓迎してくれた。日本人ですというだけで、すごく喜んで、一緒に写真を撮りたいとも言ってくれた。そんな月に滞在できたことはとても運がよか

った。おかげで、普段関わることのない地域の人たちや他の幼稚園生と話す機会ができた。そこでの出会いで、家庭で英語スクールをしている人と出会い、それに参加させてもらったこともあった。インドネシアでの英語教育について興味があって、それに関することを計画されたもの以外で、学ぶ機会を自分から動いて繋げることができた。

今回のプロジェクトの募集要項に、学校スタッフとのコミュニケーションは英語となると書いてあったことから、インドネシアに行く前までは、英語の勉強に励んでいた。ホームステイ先の家庭では、ホストマザーとファザーは英語が話せないが、ホストブラザーは話せるという情報があったため、言葉については英語で大丈夫だろうという慢心があった。実際インドネシアへ行くと、英語を話した機会は週に 2, 3 回程度であり、他は主に Google 翻訳機を使ったり、覚えたインドネシア語を話してみたりしてコミュニケーションをとった。住んでいたところが山を登る途中にある町だったことから、電波がないときもあり、その時は持参したインドネシア語の本を駆使した。相手の言葉が分からないと、本当に小さな子どもよりも役に立てないと思った。ホストファミリーの中でも、幼稚園の先生も子供たちも、英語が通じることがあまりなく、当たり前に言葉が通じる環境がありがたく感じた。ただ、その生活も私にとってはとても貴重なものであった。普段相手も自分もお互いの言葉が分からないということは普段あまりないものであり、また現地の言葉を使うことは、それだけでも人と人との距離を近くするのだろうと実体験できた。私のインドネシア語がどれだけたどたどしくても、「インドネシア語できるんだ！」と喜んでくれたり、使いやすい言葉を教えてくれたりした。幼稚園の先生に尋ねてみれば、「頑張って私たちの言葉を話そうとしてくれているだけで嬉しい」と答えてくれた。確かに海外から来た人がなんとか日本語を話そうとしている姿を見るのはとても微笑ましく、嬉しいものだ。

プロジェクトサイトの幼稚園では、先生が 4 人と事務の人が 1 人いて、4 つのクラスがあった。子供たちはインドネシア語しか話せないため、会話をすることは難しかったが、ボディーランゲージや先生を通じてのコミュニケーションをとることを心がけた。幼稚園初日、クラスではすでにワークが始まっていて、私はその見学をするよう言い渡された。ワークは、プロジェクトサイトであるバンジャルヌガラの伝統衣装を塗り絵していて、私はそれをしている子どもに、グーグル翻訳で「見てもいい？」をインドネシア語に訳したものを見せたのだが、顔を横に振られてしまった。小さな子供に対しても、話しかけるのにそれなりの勇気を出したのでその時は少しショックだったが、後から文字が分からなかったのではと気が付いた。それにより文字での会話が不可能と分かったので必死に発音を身につけなければいけないと焦りも生まれた。結局、最終日になってもすべての言葉を聞き取ることは難しかった。子供からの疑問形のような言葉も分からないまま勘で答えてしまうことが多かった。私や日本に対する純粋な興味を無碍にしてしまったと後悔している。ただ、遊ぶときには言葉はあまりいらないので、私は子供たちが幼稚園にいるうちは休む時間を惜しんでずっと彼らと関わっていた。幼稚園内にある遊具に一緒に乗ったり、追いかけっこをしたり、おやつを分け合ったりした。子供たちはとてもフレンドリーであり、初めのうちはすこし警戒されていたが、数日もしないうちに私の名前も国も覚えてくれて、話しかけてくれた。先生や保護者に手伝ってもらって、折り紙やおにぎりを教える機会があった。折り紙では、子供達には簡単に作れて遊ぶこともできる、ドラえもんともかかわらせて分かりやすいようにタケコプターを、たくさんな幼稚園の先生が集まる時には鶴に足を足して鶏を模したものと、ウサギを教えた。折り方をインドネシア語に訳しそれをメモしたものを見せながら、一人ひとりの様子を見ながら教えることは一苦労だったが、その時作ったものを今も大切にしてくれると先日メッセージを送ってくれた人がいて頑張った甲斐があったと思えた。おにぎりは、保護者に教えて一緒に作って、それを子供たちにおやつとしてあげた。ムスリムの人たちは左手を触れてはいかないからおにぎりが作れないのではな

いかという不安もあったが、どうやらビニール袋をつければ問題ないようだった。案外イスラム教のルールも柔軟なのか。どうしてもみんなご飯を固く握って形をつくろうとしていたので、ゆっくり手本を見せながら、「Pedang dengan lembat (そっと握って)」と繰り返しながら教えていった。保護者たちみんなで作ったおにぎりを、子供たちが何個もおかわりしてたくさん食べてくれた。日本と同じようなお米が使われているから、おにぎりはきっと受け入れられやすいのだろう。

この１ヶ月は、今までで一番濃密な時間であった。初めての土地、初めての言語、初めての文化の中で私は今どうすべきかを常に考え行動してきた。インドネシア人の国民性である大雑把な感じに不安も覚えたこともあり、日本との環境の違いに体調を崩したこともあった。ただ、それでもフレンドリーで元気で朗らかなインドネシアの人たちに助けられた。私がやってみたいこと、行きたい所、食べたいものを叶えようとしてくれた。ジャワやバンジャルヌガラの伝統的な恰好や踊りを体験させてくれた。単に旅行に行くだけでは絶対に体験できないようなことができて、日本とインドネシアについてたくさんお話ができて、私のインドネシアへ行くという判断を間違えではないと言ってくれているような気がした。また機会を作って、インドネシアでお世話になった人たちに会いに行きたい。その時はインドネシア語を完璧に使えるようにして、彼らに恩返しをしたい。